

〈 子ども特別賞 〉 俊じいの表札

水入 東子

連休の一泊旅行は母の提案で三瓶山に決まった。それはリビングのピアノの上にある写真 | 母の祖父母、俊じいとひいちゃん | の古い家がどうなっているかを確かめるのが一番の目的らしい。

乗り気な計画じゃないけど塾の宿題から逃げる理由だけで賛成した。

会ったことはない俊じいと去年九十九歳で死んだひいちゃんの家は浜田で、帰省のたび必ず寄って遊んだりご飯を食べたり、仏さんにもお参りする。だから三瓶の家は別荘という事だ。私は小説やドラマに登場するおしゃれな建物を想像し、少しわくわくした。

その日は風が強く空も灰色、母は山のふもとで馬に乗るのが三瓶では定番だったと言ったが、ようやく車から降りた目の前は馬どころか誰もいない殺風景な風景だった。

「あれえ、昔と全然違うー」と母は首をかしげたが、全員気を取り直し、すそ野に沿った道から一つ外れた細道を行くと木が生い茂った目的地らしい別荘地に着いた。

確かここだよ、と不安そうな母が恐る恐る父と車から出たが、窓一面に映る枝が伸び放題の暗い雑木林に私と弟は降りる気はない。

「そう、そう、あれ。あの家よ！」

腰まで伸びた雑草がふさぐ道を前に母が一生懸命指さす方向にはぶら下がった枯れ枝の間からぼろぼろな一軒家が見えた。

ええ！あれが別荘？と私はがっかりで、早くホテルに行こうよ、と弟も叫んだ。

「何とか、あの表札だけ持って帰れんかしら」と悔しそうだったが、この格好じゃ、ちょっと近寄れんなあという父の言葉に、母は俊じいの表札をあきらめた。

ごめんごめん、あれはないよね、と謝りながら母は何枚も何枚も家の写真を撮った。

夕食後、何となくふてくされている私に母はぼつりぼつりと昔話を始めた。

俊じいとひいちゃんは二人ともお父さんを早く亡くし、長男と長女だった夫婦は実家に仕送りをしたり、若い頃は苦労した事。共働きでやっと豊かな暮らしになり、黒川に初めての家を買った事。一人娘、つまり私のばあばに二人子供が生まれて大喜び、孫の為にと知り合いから中古の別荘を買い、母達が中学生になる頃まで週末には俊じい、ひいちゃんと家族でやって来て、キャッチボールや竹馬、庭にはハンモックも吊るし、雪の日に巨大なかまくらも造った事。だけど進学や受験、祖父母の病気が続き、しだいに別荘に行かなくなり、今日は三十年ぶりで昔の面影なんて全然なかったけれど、一緒に来れて良かった、ありがとうね、と少し鼻声になっていた。

子供の頃の母と伯父、元気な俊じいやひいちゃん、若いばあばとじいじも三瓶山を見上げ別荘の庭ではしゃいでいる姿が目には浮かぶ。

「今度はばあば達も連れて来ようよ」

もう一度昔みたいな別荘にして、あの表札をかけよう。いつになるか分からないけれど、そんな夢の計画が私の胸の中で生まれた。